

三島由紀夫事件（90・12・7）

徳岡 孝夫（昭25・文甲）

三島由紀夫さんは、ある雑誌のアンケート「人生の最上の幸福は？」に「仕事及び孤独」と答えております。また「人生最大の不幸は？」と聞かれて「孤独及び仕事」と書いております。私は新聞記者を辞めてから、仕事及び孤独を味わおうと思いましたが、はからずも名古屋の方の女子短大に教えに行く事になり、その経験を「女子学生亡国論改訂版」に書いております。ふざけた文章を甚だ申しわけなく思っております。

三島さんという人の死も、その言葉と同じように逆説に富んだもので、いろんな解釈が成り立つと思います。ですからあまりこれはホモセクシャルな死であるとか、美学的な死であるとか、単純には割り切れないのではないかと私は思っております。とりあえず事実だけを申し上げます。あれは昭和四十五年十一月二十五日、非常によく晴れた小春日和の日でした。前日すなわち二十四日の午後二時過ぎ、私は当時「サンデー毎日」の編集次長をしていましたが、三島さんから

電話がありました。「明日午前十一時に、あるところに来ていただきたいが、来て下さいますか」と、落ち着いた声で丁寧な口ぶりでした。いつもの通り三島さんらしい、折り目正しい言葉遣いでした。

私は「いいですよ」と答えました。三島さんは「実は純粹に私事なんで恐縮ですが、しかし女性週刊誌がびつくりするようなスクランダルじゃありませんからね、それだけは保証します。ハッハッハ」と笑いました。「おいで願う場所は、明日朝十時に電話で指定するから編集部にて下さい。あ、それから」と最後に言ったんです。「すみませんが、毎日新聞の腕章と、出来ればカメラを持って来て下さい」と。

三島さんはそういう秘密めかした事が大好きな、面白い事をするのが好きな人でしたから、私は何気なく引き受けました。

その時の電話で三島さんは、「あの時は楽しかった。ホントに楽しかった」と何度も言いました。二カ月前に三島さんに招かれて、銀座の関西料理店で御馳走になったときのことを言ったものと思われます。しかし当日、三島さん楽しそうなふうでは全然なかったのです。その小料理屋に呼んで下さるのも、三年前にバンコクで世話になったお礼だというのです。私はたしかにバンコクで三島さんと一週間程一緒にいましたが、お世話なんかした覚えはありません。それは一九六七年の秋でした。私は毎日新聞社の特派員としてバンコクにいて、本社からの電報で三島

由紀夫氏がバンコクに滞在中であることを知りました。

そのときの三島さんのバンコクの滞在には二つの目的がありました。一つはノーベル賞の予備取材を避ける為でした。前の年にノーベル文学賞が出るんじゃないかという話があり、そのときに新聞社や出版社に請われて予定談話をしゃべってしまつてバツの悪い思いをした。それを繰り返したくないというのがバンコク滞在の一つの理由、つまり日本のマスコミを避けるためでした。もう一つの理由は「暁の寺」の取材のためでした。これは絶筆「豊饒の海」の第三部です。それに出てくる薔薇宮という宮殿の取材のためでした。

私たちは何度も、ホテルのプールサイドで、長々と一日中語り明かしました。他に友達がいずに淋しかった三島さん、時間を持って余っていた三島さんを知る人間は私位しかいないんじゃないかと思ひます。

三島さんが、バンコクに滞在中、何か本を貸してあげようと思つたんですが、何せベトナム戦争を取材するための特派員で、ろくな本を持って行っておりません。只一冊、岩波の日本古典文学体系の中から「和漢朗詠集」を持って行つて行つておりました。ご存じのように、平安時代のリーダーズ・ダイジェストです。それを三島さんに貸しました。あの本の中には何度も「天人五衰」という言葉が出て来ます。「生ある者は必ず滅す、楽しみ尽きて悲しみ来たる、天人もお五衰の日に遇えり」といったふうです。三島さんが死ぬ日の朝に編集者に渡した絶筆は「天人五衰」

という題でした。

死の三カ月前の小料理屋の話に戻ります。三島さんは全然楽しいどころではなかった。お酒飲んで畳の上に寝ころんで「徳岡さん、自衛隊はもうダメだ」と、暗い話でした。草むらで、ほんとにこれぞと信じた兵士と一緒に決起しようとしたが、いや憲法がありますからと言って断わられた。あいつら骨の髄まで腐ってしまったということでした。

さて十一月二十四日の事です。そのとき三島さんはパレスホテルで予行演習をしました。一人を益田総監に見立てて、三島さんが日本刀を見せ、日本刀を返してもらって「小賀、ハンカチ」と言った時に、パツとかかって益田さんにサルグツワをはめ、椅子に縛り付けるといふ練習をしたんですね。そしてそのホテルの部屋から、私とNHKの伊達宗克氏に電話をして、「明日、ある所へ来てくれますか」と言ったのです。それから午後六時ごろ新橋の末源という所で、二時間ほど同志四人とともに最後の食事をしました。家に帰って「天人五衰」の終章の百四十枚に手を入れて「完」と書きました。

さて、十一月二十五日です。澄み渡った空でした。前日の約束どおり午前十時にサンデー毎日の編集部が電話がかかって来まして、落ちついた声でした。「自衛隊市ヶ谷駐屯地のすぐ傍に、市ヶ谷会館というのが。そこに十一時に来ていただけませんか。玄関に盾の会の制服を着た倉田または田中という者がいます。その者の指示に従って下さい。では十一時に」と言って電話

が切れました。彼と会話をしたのはそれが最後でした。

私は十一時より少し早く市ヶ谷会館に行きまして「倉田君か田中君はいませんか」と聞くと、「いません」という返事です。おかしいなと二階へ上ったら「盾の会御席」と書いた部屋で三十人程がお茶飲んだりカレーライス食べたりしていました。そこで「倉田か田中はいませんか」と聞くと「玄関にいますよ」と言うんですね。ますますおかしいな思っているうちに、十一時になったら、先程違えますと言った若者が近寄って来まして「申し訳ありません、実は、三島隊長から時間厳守せよと命令を受けておりましたので、否定いたしました。私が田中です」と言つて封筒を渡したんです。手紙と、檄と、そして写真が入っておりました。写真は三島さんを入れて五人がそれぞれに写した写真と、グループで写した写真と、五人別々のと、それから別に森田の写真が入っておりました。それぞれ裏にちゃんと自筆で名前が書いておりました。

手紙を先ず開けました。

「傍目にはいかに狂気の沙汰に見えようとも小生等としては、純粹に憂国の情に出たるものである事をご理解いただきたく思います。」という文面でした。「暫くここにおつて下さい、そのうち何かの動きがあるから、その時には腕章をつけて市ヶ谷自衛隊の方へ入つて来てくれ」と書いてありました。ペランダに出て見ていると、間もなく市ヶ谷の自衛隊の方へ上る坂道を、白いジープが全速力で上つて来ました。自衛隊の警務部の車です。おかしいなと思う間もなくパトカーが

来ました。そこで私は腕章をつけて行きました。まだ百人位しかバルコニーの前に集まってませんでしたが、そのうちに千人位になりました。

バルコニーの上に三島さんと森田の顔が見え、そして、演説が始まりました。私は、五メートルほど下で聞いておったんですが、三島さんが、あの大きい声で……あつ、これをやる為に三島さんは鍛えて来たんだなと思いました。「我々は自衛隊を兄だと思つて来た」と三島さんが言つたら、下から「そんなら何故傷つけた」と怒鳴り返した隊員がいた。彼は直ちに「抵抗したからだ」とやり返しました。そのうちに新聞社のヘリが代る代るに寄つて来て撮影しました。

四十五歳、三島さんは健康でした。才能がありました。お金も家族もありました。半年程前彼の自宅へ行った時、玄関に子供の三輪車が置いてありました。そんな人が、まさか死ぬまいというのが私の独断でした。そのうちに、森田と三島さんが並んで「天皇陛下万歳」をやつて、そして中へ入つて先ず三島さんが、続いて森田が切腹したらしいです。三島さんの切腹は、後で聞きました。古式通りのものだったらしいです。森田の方は腹の皮を切ただけでしたが、古賀が介錯して死にました。一刀の下に首を落としましたそうです。

まもなく自衛隊の広報官が降りて来て発表しました。「切腹をしました」そう言つたんですね。「介錯もいたしました」誰も信じられなかったです。一人の記者がややあつて、「それで、首は胴体を離れたんですか」と聞き、広報官はオウム返しに、「はい、首は胴体を離れました」と答

えました。私は初めて三島さんが死んだ事を、疑問の余地無いまでに知りました。

三島さんは何故死んだかと言われると、ちょっと複雑な事になってまいります。

亡くなりましてから一年後の十一月、私は奈良郊外の帯解にある円照寺を訪ねました。それは、「天人五衰」の最後に出て来る月修寺のモデルです。実はその月修寺というのは、四部作「豊饒の海」の第一巻「春の雪」の中にも出て来ます。この作には松枝清頭と本多繁邦という二人の青年と綾倉聡子という美しい娘が出てきます。侯爵の娘で、古い雅楽の家の出です。清頭と聡子は恋をするが、なかなかうまく行かない。聡子がさるやんごとない方と婚約をして、納采の儀も済んだ後に、初めて清頭と情交を持つんです。

聡子は妊娠・流産し、病氣と称して出家して、月修寺に入ります。清頭は何度も何度も雨の中を面会に行くが、追い返されます。そして清頭は病氣になって死ぬというのが第一巻「春の雪」の筋書です。第二巻以後、綾倉聡子の霊は輪廻します。その証拠に、みんな脇に三つの黒子があります。そういう物語です。

そして第四部の「天人五衰」の末尾、老いた本多繁邦が聡子に会うため帯解の月修寺に参ります。

綾倉聡子のかつての恋人、松枝清頭が死んでから、既に六十年が経ち、聡子は月修寺の門跡になっております。

「人生で最後の楽しみでもあり、務めでもあり、是非あなたにお目にかかりたい」と本多は聡子に手紙を出して、「そこまでおっしゃるんだったらどうぞお越し下さい」と云う返事をもらって月修寺へ行くんです。夏、真夏です。セミの声が降るようにする。夏雲が広がっている。夏草が茂っている。つまり、それは終戦の時の光景なんです。三島さんにとって終戦というのは非常に大事、我々の世代にとって終戦とは非常に大事なものでした。それが、最後の小説の最後の場面に出てくるんです。本多は苦労しながら月修寺の山門への道を歩いて行きます。崩し市松模様
に石が敷いてある道です。本多は八十一歳になっております。汗がワイシャツを通して背広の背
中までしみ出る。杖をついて行き、やっと門跡に面会が許される。門跡は八十三歳です。六十年
ぶりに会って、涙が滲んでお顔もよく見えない。本多は自分が清頭きよかぶの友であると自己紹介をし、
友が聡子を恋焦れながら死んだ次第を物語ります。ところがじいっと聞いていた門跡である聡子
は静かに「そのお人はどういうお方やした？」と聞くんです。「はあー」本多は理解出来ないん
ですね。「全然存じません」と聡子。

「しかし、あなたは綾倉聡子さんでしょう、知らない筈ありません」

「私は俗世で受けた縁ゆかりは何ひとつ忘れませんが、そんなお人はもともとあらっしやらなかったの
と違いますか。あなたはその清頭きよかぶというお人に、本当にこの世でお会いになったんですか」と聡
子は聞くんですね。本多繁邦は呆然とします。もし清頭きよかぶが生きていなかったとしたら、この自分

の存在すらも……自分も生きているか死んでいるか、存在しているか存在していないか分からない、どう考えたらいいか。「私は出家する前の事は覚えておられるけれど、松枝清顕という人はあらうかと思える本多にかぶせるように綾倉聡子が云うんです。「心ごころですさかいに」。すべては現（うつつ）か幻か——自分は存在しているのかいないのか。人のいのちとは漆の盆に吐きかけた息のようなもので、有るといえば有るが、無いといえば無い、そういうものじゃないか、数珠を繰るようなセミの音だけが辺りを領していたという文章で、この長編小説は終わります。三島さんはこの原稿を自決の日の朝に新潮社の記者に残しました。

小説の中で三島さんは、この月修寺を法相宗にしております。法相というのは華嚴宗なんかと同じように南都五宗の一つで、人間の見るものは全て幻にすぎない……というのが教義の中にあるらしいんです。そうすると、三島さんが何故死んだかという事も非常に哲学的な話になってまいります。私は三島さんより五歳若かったですけど、自分が四十五歳になりました時に、おとこ、横を振り返るような気がいたしました。今、三島さんを越えて行くんだなあという気がしたんです。四十五歳は若さの残る最後の年です。大きい声で叫べる、腹切って美しく死ぬる最後の年です。しかし、それだけではない。自分の肉体的な美を全うするためだけにやなくて、大昔から日本人が考えてきた「この世をば何たとえん朝ぼらけ漕ぎゆく舟の後の白波」と

いう、ああいうふうな無常感による自殺というふうに解釈出来ない事も無いと思うんですね。私は今でもあの人なぜ死んだのかなあと思つて考えるときがあるが、市ヶ谷会館でもらつた手紙や、写真を夜ひとり書齋で出して見る勇気がないんです。

三島事件は、今でも日本人の心のタブーのようになっています。二十周年にも新聞にはほとんど出ませんでした。何故か。一番大きい理由は、本当はみんな三島事件を考えるのが怖いからだと思いますね。

(ジャーナリスト・毎日新聞社名誉職員)